

(2) 事業の総括概況

本学校法人北星学園の2017年度における事業の運営総括概要は、以下のとおりである。

2017 度 学園運営総括

理事長 大山 綱夫

はじめに

2017 年は、北星学園創立 130 周年に当たりました。学園は、この記念すべき年、学園目標を「神のもとで働く者として」と定め、年間聖句に「コリントの信徒への手紙一 3 章 9 節」の「わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです。」を選びました。学園は、この目標と聖句のもと、学園運営に当たってきました。

スミス先生の祈りと献身によって創立された北星学園は、彼女に続いた宣教師たちや日本人協力者によって担われましたが、同時に国内外の多くの人々の祈りや具体的支援によっても支えられました。130 周年はそのことに思いを馳せる機会でもありました。スミス先生の母教会、エルマイラ第一長老教会代表 7 名の記念式典への出席は、学園草創期に海を越えて注がれた祈りや支えを想起させてくれました。また、大学が創立まもない 1963 年に火災で校舎を失った時、ウェブスター・グロウプス教会からチャペル建設のために、ハンティングリッジ教会からはパイプオルガン設置のために多額の寄附金があったことは、半世紀を過ぎた現在ほとんど覚えられないこともなくなっていました。昨年夏に訪米し、改めての感謝と現在の学園の様子を伝えることができました。特にウェブスター・グロウプス教会の場合、火災により部分焼失した同教会堂の改築のための積立金だったといわれ、北星学園への寄付金の背後にあった祈りと決断の尊さに頭の下がる思いでした。キリスト教学校としてのミッションに共鳴・賛同する人々の協力があっての 130 周年であったことを改めて想起する一年でした。130 周年に際しては、多くの方々から、暖かい賛辞とお祝いの言葉を頂戴しました。学園内外の全ての関係者に心からの感謝を申し上げます。

長年の懸案である余市高校の将来については 2016 年 9 月の理事会で方針が決められましたが、2017 年度の入学生徒数は条件を満たし、従来どおりの学校運営を続けることができました。しかし、学年途中で編入学や休・退学で変動する生徒数規模、さらには若年人口の減少という大状況のなかで、教育目標の重要性にもかかわらず、厳しい財政状況は変わってはいません。理事会方針を維持できたにしても、将来展望が相伴しなければなりません。教育目標・地域との協働等、再点検の必要性は続きます。若年人口の減少への対応は、余市高校のみならず学園内各校にとっても共通課題であり、学園教育の将来像を考える際に、こうした大状況の変化を見据えておかねばなりません。

2017 年度は、学園がいくつもの苦節を経ながらも、「神のもとで…神のために力を合わせて働いた人々」の足跡を想起し、将来への責務を覚える年度でした。学園目標と年間聖句は、学園に働く者への年度を越えた促がしとして受け止めたいと思います。

以下 6 項目は 2017 年度の学園運営方針・計画に対応するものです。

1. 「建学の精神」に基づく教育の現代化について

北星学園は、スミス先生が書かれた「学校の根本理念」を大切に引き継ぎ、それぞれの時代

の教育実践の基に置いてきました。その前半には、学校が果たすべき責任として、多様な分野の有用な知識を教えることにより実生活上の義務と責任を果たせる人間を育てることが、そして後半には最も重要なこととして宗教的霊的影響を与えることが書かれています。この前半部分は、他のキリスト教学校の建学の精神や理念に見られない独特なものとの指摘がなされていますが、表現は異なれ、教育の「現代化」が創立以来の姿勢であったことを物語ります。創立時には想像もつかない変化の激しい現在、教育に携わる教職員への、創立者からの具体的なメッセージと受け止めねばなりません。「現代化」は、就学人口の変化、義務教育化の色濃い高等学校、ユニバーサル型（進学率 50%以上のこと）といわれる大学、生徒・学生の意識の変化、更には若者文化や教育にさえ影響を及ぼしている IT 技術、等々の課題に適切に対応するものでなくてはなりません。

2017 年度、学園全体では、学園キリスト教センター主催の研究会、更に全教職員及び理事を対象とした学園研修会で、現状認識の共有に努め、また各校独自の諸研究（修）会では学種に応じた課題への取組みが議論されました。それらの取組みの一部は、学園内諸刊行物に報告されています。

2. 一つの学園としてのより緊密な連携強化について

学園では各校が独自の教育活動を進めると同時に、一つの学園として連携の強化を図ってきました。これまでの主な年間行事は、学園教職員研修会と学園クリスマス礼拝ですが、学園内教育連携委員会によって各校間の連携に取り組んできました。2017 年度の学園研修会は「これからの北星学園－各校の協力の可能性を探る－」をテーマに、全日程を教員と事務・用務職員が合同で実施しました。午前には内田樹氏による基調講演、午後は学園各校からの事例報告等を行い、その後、各校の協力についてグループディスカッションを活発に行うなど、積極的な交流の研修会となりました。

学園内教育連携委員会では、各年度 2000 万円（2017 年度から 2019 年度まで）を上限とする政策予備費を中学高校が必要、喫緊の事業に充ててきました。とくに本年は政策予備費の「傾斜配分」をめぐる掘り下げた議論を行い、予算配分の視点を決めました。本学園の特色である政策予備費は、総合学園ゆえに可能な支出項目であり、学園ならではの教育努力を支えるものとなっています。

各校間の連携・協力については、学園内教育連携委員会で調整し、大学・短大の教学会議や入学試験センターの理解を得て積極的な連携展開を行いました。女子高においては 2019 年度から「Core コース高大連携プログラム」として、本格的に大学・短大の全学科による連続模擬講義を実施することし、今年度は 3 学科の協力で試行実施しました。附属高校においては「大学生学習アシスタント」として定期試験前の学習支援を実施するとともに、推薦合格者対象の入学前教育である「探究プログラム」でも、大学を会場にして学科教員によるレクチャーと図書館活用ガイダンスを実施しました。

また、女子高の新規事業である English Lounge の公開授業を連携委員会のメンバーで見学しました。このような見学によって、各校の教育実践の理解に繋がり、積極的な交流にもなっています。

一方、学園内高校から大学や短大に進学した学生の学修・課外活動状況を高校に提示してきました。この取組みが 4 年を経たので、各高校での活用状況や有効利用に向けて、更に情報交換が必要です。

3. 学園キリスト教教育の推進について

建学の精神を具体化するために、キリスト教教育活動の発展に取り組んできました。とりわけ、学園創立 130 周年を迎えた今年度は、記念誌『サラ・スミスと女性宣教師－北星学園を築いた人々－』を発行いたしました。この記念誌の配布等によって、創設者とその後継者たちの

教育精神や実践を広めるように務めています。また、宗教主任会議との提携によって、学園各校のキリスト教活動を把握する一方で、今後の課題を見出し、キリスト教教育の前進に努めていました。

学園キリスト教センターでは、運営委員会の計画に沿って、チャプレンや宗教主任の指導のもと各校のキリスト教活動を援助しました。一方、センターの活動として、引き続き学園関係資料の収集、整理、保存に努めてきています。その収集状況をセンター事務室報「ライラック」に随時掲載しました。とりわけ 130 周年記念誌作成時に使用した資料を整理しつつありますが、引き続きその取組みが課題です。具体的には次のようなことを実施しました。

- ・年一回のセンター報『北星教育』(9号)、年報『北星教育と現代』(第6号)を発行し、6月に宗教改革500年、11月に学園130年誌の講演会を実施しました。
- ・2月に4回目となる大学・短大の学園内推薦入学予定者を対象とした「学園内推薦入学者の集い」を実施し、キリスト教活動の紹介等で生徒が在學生と交流を図りました。この企画を昨年より1ヶ月早い卒業式前に実施した結果、多くの入学予定者が参加しました。
- ・教職員、生徒・学生のキリスト教理解とセンター主催の活動への参画を目的として、「キリスト教センター活動案内」を作成しました。
- ・女子中高などが独自に行ってきた「祈祷会」を、「北星 ともに祈る会」として学園各校に広げる準備を進めてきました。

今後の課題としては、キリスト教会や牧師との交流会の継続、学園教育にふさわしいキャンパスプランの作成、キリスト教活動の積極的な担い手となる教職員の計画的な採用、配置等があります。

4. 中等教育部門の今後のあり方と財政健全化への取組みについて

理事会(2016年9月7日)で決定した「余市高校維持の3条件」中、次年度生徒募集の条件とした1年次入学者数70名について73名を確保したことから、2018年度の生徒募集を進めてきました。また、基本金組入前収支差額についても、生徒総数の増(2015年度168名に対し、2016年度188名、2017年度199名/5月1日現在)による補助金増と定年退職者等に伴う人件費減等により、2018年度当初予算では31,634千円まで支出超過額が減額できました。

昨年9月の理事会研究会では、「学校改革に向けた取組み」をテーマに中等教育部門3校それぞれの今後のあり方についての討議を行いました。次年度は、高等教育部門や法人運営、さらに財務・財政をも含めた2020年度から2029年度までの10年間における学園将来構想(グランドデザイン)の検討を、学園総合企画委員会及び学園内教育連携委員会のもとで開始することとしました。

5. 新給与体系への取組みについて

「新給与体系の策定に係るロードマップ」を2017年3月に確認後、教職員組合からの春季要求を発端に「給与等削減措置と定年延長(段階的並行実施を含む)」及び「嘱託再雇用者(定年退職後、標準的な年金支給開始年齢である65歳まで)の給与改善」を課題として、教職員組合等の意見を確認しながら進めることとなりました。

2018年3月にはロードマップを見直し、2019年4月の新給与体系移行を目指してその取組みを開始しました。

6. 学園創立130周年記念事業への取組みについて

「学園創立130周年記念事業実行委員会」が立案した米国ウェブスター・グローブス教会等への訪問、札幌駅前通地下歩行空間壁面への広告掲載等の広告活動を進め、9月30日にはエルマイラ教会から7名をお招きし、学園スミス記念講堂において記念式典を挙るとともに記念講演会を開催するなどの事業について、計画通り滞りなく終えることが出来ました。

また、記念史編集委員会が3年の歳月を掛けて編集した創立130周年記念誌「サラ・スミスと女性宣教師－北星学園を築いた人々」を出版しました。

さらに、創立130周年を機に学園各校一層絆を深め、世にあって星のように輝く人材を育むことを願い、学校法人のシンボルマークとロゴマークを制作しました。

以 上